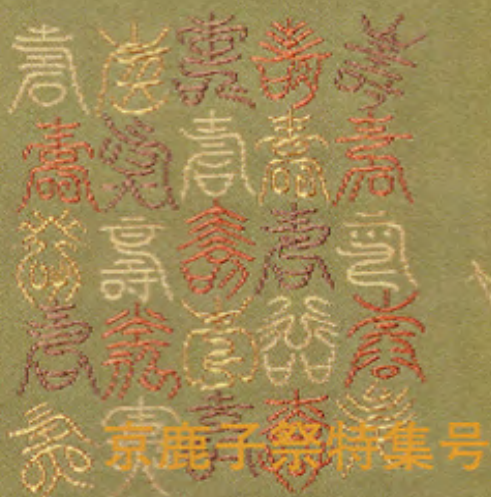


京鹿子

京都府立総合資料館
 〒600-8211 京都府京都市下京区山科
 TEL: 075-751-0000 FAX: 075-751-0001
 www.kyoto.ac.jp



1月号

豊田都峰

灌響集 その四十一

悼む身の露のしづくのことばして
系がれば露にまみれる悼みかな
光彩の三門と化し秋を立つ
木守柿消点として暮れなづむ
雑木もみぢ日記明日へとはみだせり
遠くきてすすきが原のかなたの雲



あこがれは翔てぬすすきを瘦せさせる
月光のすすきが原は分けもせず
藍より出青はいづこと草の絮
花蓼や片手をがみに辻地蔵
花蓼に丘の夕日のすべり消ゆ
藁塚三つ並んで日暮れは山より来
外灯は浦風の中冬めける

俳句界一月号「里ぐらし」十句出詠

—丸山佳子作品—

春着縫ふ

丸山佳子



柚子風呂の玻璃のきら星衣をぬぐ
柚子風呂に肌ふれあうて女どち
柚子の香の汗一すぢや湯にひたる
春着縫ふ金糸銀子のひざに散り
縫ひあげしひとの春着に袖とほす

秀華採集

霜降のとうふ屋の灯の乳いろに

鈴 鹿 けい子

「霜降」のイメージをたいへん具体的ににした点を評価したい。特に早暁から作業している場の灯、それが湯気や冷氣などのためであろう、「乳いろ」とした点がよい。

うす紙をはがし尽せば吾亦紅

高 木 晶 子

朝鴉の声をさへぎる花頭窓

唐 澤 よし枝

前句は「吾亦紅」の在り方はこのような状態であると詠う。後句は、寺の持つきびしさを「花頭窓」というよいものを選び詠った点を評価したい。発見の楽しさである。

鈴鹿 仁

風の女神

枯尾花風の女神にある仔細

朝和ぎの夢見ごここに牡蠣育つ

牡蠣殻や身に覚えなき傷のあと

佛みちゑくぼ貌して柚子は黄に

いつぽんの裸木つよし明日へ風

近 詠

和田 照海

いわし雲

都より赦免は未だ墓鳴けり

とび島を一網打尽いわし雲

余生には余生の月日水中花

こんなにも近道し鉄道草

家舟を洗ふ良夜の汐汲みて



敬老の日 北村香朗

何日までの長生きなるや敬老日
敬老日ふと忘れたる老眼鏡
敬老の日も次ぎの日も過ぎゆきて
変化して動きの早き秋の雲
宮城の土手は息のむ曼珠沙華

水の陰翳 藤岡紫水

木籠りに鳴く樞鳥や宇陀も奥
野には野の山には山の秋の風
人の世のその先知らず返り花
水の中に水の陰翳ありて冬
まほろばの空の深さに実むらさき

癸巳年初 竹貫示虹

空 数字の並ぶ新暦
平凡に祈る平安初日の出
朗々と寒の月あげ法の山
大塞の夜明けピシピシ星の鉦
齢とらぬ妻の遺影と屠蘇交す

松田都青

死に至るまでの退屈蘆の花
泥舟に乗らぬ世渡り秋の月
夜業して老衰のあと考えず
家来なき亭主関白天高し
秋日落ち使徒の野宿は莫塵一枚

萩浄土 丸井巴水

酒蔵と分かつ古刹の萩の水
萩割つて細き浄土の石畳
萩越しに姫と呼びたき笑顔あり
ここからは萩の終りの風となる
夜は天へ返る古刹の萩の花

塩貝朱千

三人の見てゐる三羽かいつぶり
水鳥の群翔ち夜網打つ影に
結末はどんでん返し鴨飛翔
魯田や小さき無人精米所
文化の日お洒落をさせてドッグカフェ

海道賞受賞作品抄

高槻市

安田優歌

既作

新作

ひとふとの竹踏み二月渴きゐる

木の芽晴れ鏡の中の待ち時間

芽吹き野の子らは太陽つかひ切る

水面とはひかりの住処飛花しきり

おほむらさき卑弥呼の領巾として応ふ

藤けむる抜けてゆくなりしつけ糸

三輪車もう陽炎に融けてゐる

曼陀羅のまん中に落つ白椿

父情とはたつた一言唐辛子

雪解まち鉦は裏口から入る

れもん酒をのんで白雲ただよはす

沙羅の花濡れたる雲の通ふかな

京鹿子大賞受賞作品抄

京都市

井尻 妙子

人違ひして万緑の外に出る

晩年の母の独学ちちろ鳴く

梅雨星を数ふ素直になれるまで

ひと言を温めてゐる草の花

遠汽笛回転椅子の夏に向く

身離れのよき魚若狭しぐれかな

叱られたことなき父の墓洗ふ

行く秋の予定表より消す予定

つなぐ手の欲しき初秋の水ほとり

思ひきり転んだあとの冬夕焼

秋冷や城に幾つの隠し部屋

鱸酒のすすむ末席確保して

京鹿子新賞受賞作品抄

東大阪市

高田風信子

浪花にはキタ派ミナミ派生ビール

句ごころを呼びさましたる唐がらし

夏蝶や難波宮のいまむかし

龍馬像のはるけき視線鳥渡る

下駄音の高き露地裏夏の月

つゆくさは星のかけらと言ふべしや

さはやかに三角点にふれる旅

牛乳瓶の白き曇りや初しぐれ

渋団扇浮世の憂さは捨てたかに

なまなかに人を許さず毛糸編む

歳月は光と影や星流る

一行の追伸文や冬銀河

京鹿子新賞受賞作品抄

京都市

秋岡美津子

どら焼きのやうな日焼子お使ひに

ハロウィンや箒に乗れない魔女ばかり

陸橋に人だかりして遠花火

八卦見の携帯電話星月夜

揚花火灯を消して待つ遊覧船

境内を汚さぬやうに银杏拾ふ

プロレスのポスター破れ秋夕焼け

短日や旗ふりて呼ぶ渡し舟

残る蚊に少しやせたる手足かな

黄落や金欄緞子の僧お練り

彼岸花を残す草刈事業団

紅葉谷木を咬む岩と岩咬む木

京鹿子新賞受賞作品抄

福知山市

松山潤子

行商のラツパの過る新豆腐

泥まみれ若きキヤスター蓮根掘る

癒されし刻の速さや去ぬ燕

倒木の陽差し吸ひ込み冬構

移ろひをしばし留めし虫の闇

銀色の湖面波立ち冬に入る

草風童の背を囃したて

手を引きし母の記憶や冬夕焼

菊人形在りし日の町遠こだま

街の灯の毒気なき貌河豚ちようちん

知らぬ間に家風に染まり天高し

やんちやなる傷も頼もし冬日向

京鹿子新賞受賞作品抄

福山市

石井一石

唐破風の古りし氏神日の盛

表装に萩をこぼしてこひのうた

里の池満水にして梅雨明くる

をみなへし峠の民話かたり継ぐ

家中が桃のかをりに染まりけり

邯鄲に前座委ねし能舞台

法師蟬前線わづか南下中

柿熟れて中庸といふ甘さかな

露天湯に竹の落葉と二人きり

栗ごはん仏の母に味を問ひ

秋澄むや山のむかうに海の声

屠蘇くむや父子二代の下戸なれど

募集大作賞

京都市

鈴鹿けい子

うたて
転

根雪踏む音まとひつく古戦場

蠟涙や途方に暮るる凍る瀧

枯葦の囀音は風の傀儡師

筆蹟の身元曝すや枯櫂

未決箱によもやの溜まる霜の夜

密書との赤い印字や月の暈

怪文書の尻尾つかめず蝌蚪の群

鶏頭の含み笑ひや魑魅の夜

お払ひ箱の中の齒軋り虎落笛

鯉の視野に吃音でくる夕しぐれ

ことここに至れば婆娑羅黄落す

風花の聲はひろへず殞

隠り沼も中原も知り山眠る

四ツ足の爪たててくる春一番

二重封筒の外側にある春の闇

双滴賞受賞作品

都峰 三賞

桜東風歩を晩年の持ち駒に

海月浮くただ待つことのむつかしく

穂芒の風となりたる大観峰

門馬貴美子

桑田 多津

永岡 享子

佳子 三賞

菜の花やいつかは点となる記憶

棒読みの一日を終へる青簾

大漁の鱒砲列に耀られけり

瀬尾千鶴枝

吉田 悌子

杉山はつ江

京鹿子集

豊田都峰選

京都 鈴鹿けい子

霜降のとうふ屋の灯の乳いろに
専にはかる気脈や蔦かづら
若書きとおぼしき文や銀木犀
石見半紙のざらつく面暈の月
うす紙をはがし尽せば吾亦紅
風の道背を押されて萩まつり
万分の凶となる日よ銀杏熟れ
新刊書月のあかりの差すあたり
朝鴟の声をさへぎる花頭窓
秋の蝶影を濃く引く日差しかな

高木 晶子

唐澤よし枝

猫じやらし揺れ通しなる高速道

庭園に桔梗の咲く切絵展

秋天や白亜の教会旧友と

論文は採択されて秋の天

喜びは家族で分かつ鯛雲

父子にてメールを交はす秋麗ら

秋風にペダルは軽く通学路

異国とはついよく見えて秋思かな

日本語の豊かさを知り爽やかに

人情に国境はなし水澄める

アリソナ 伊吹 之博

ロサンゼルス 丸田 信宏